

# 北楯大堰 周辺マップ

## 「疏水百選」とは

疏水とは、灌漑や舟運のために、新たに土地を切り開いて水路を設け、通水させることをいう。

「疏水百選」は40万kmに及ぶ全国の疏水から、農業・地域振興や歴史・文化、景観を考慮し、次世代に継承していく必要があるものを選定している。

疏水を国民的な財産として、地域とともに保全していくために、人々の理解を醸成する目的がある。



## きよかわ 清川だし

最上川沿いに吹く強風を「清川だし」と言い、「日本三大悪風」に挙げられている。立川町(現庄内町)では、農作物に被害を与えるこの悪風を昭和55年から実験・活用してきた。平成6年には第1回全国風サミットを開催し、今では、風車11基、発電量6,500kW(民間含み)の『風の町』となっている。

## 北楯？北館？北館？

北館大学公の「きただて」は、最上家に仕えたときは「北館」、庄内地域が酒井家の支配となって以降は「北楯」となっている。神社は、神社登録された大正10年から「北館神社」と呼ばれている。堰の名前としては「北楯」を用いている。(最上川土地改良区誌より)

水<sup>み</sup>

土<sup>ど</sup>

里<sup>り</sup>

ウォーク

# きたただておおぜき 北楯大堰

日本の疏水百選



## 開削から四百年！

今から四百年前、広大な庄内平野は最上川の水位が低く、作物の育たない原野となっていた。慶長6年に最上義光から狩川城主として任命された北館大学助利長公が、水利に恵まれずに困窮する人々をなんとかしようと、月山を水源とする立谷沢川からの導水を計画した。慶長17年3月に堰の開削工事に着手、難工事の末、慶長17年7月に延長10kmを超える北楯大堰が完成した。その後、3年をかけて整備し、総延長は32kmに及び、狩川から余目、酒田の五千ha余りの水田を潤し、米どころ庄内平野の基礎となった。以降、国営事業等により修繕されてきたが、石積み水路の姿を残したものとなっている。

逸話として、開削工事が最も困難な箇所に差し掛かった時、最上川が氾濫し、法面が崩れて工事が進められずにいると、北館大学公は自分の馬の鞍を最上川の淵に投げ入れて川を鎮め、それ以降、順調に工事が進められたと語り継がれており、「青鞍之淵」として石碑が建てられている。

この北館大学公の功績を称えて「北館水神社」が建立され、現在の「北館神社」となり、今も庄内平野を見守り続けている。

